古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 34 号（2005 年 9 月）

『語音翻譯』札記（上）

竹越　孝

1. はじめに

中国語と琉球語の対訳語彙・短文集である『語音翻譯』は、李朝時代の文臣申叔舟（1417-1475）が成宗 2 年（1471）に著した『海東諸国紀』に附載された一篇で、同書巻末の「琉球國」全 15 条のうち最後の一条をなす。もとは燕山君 6 年（1500）に来朝した琉球国の使節梁廣等から宣慰使成希顔（1461-1513）が聞き書きした内容を、翌 7 年（1501）兵曹判書李季仝が上啓して承文院に下された文書であるとされる（田中 1991 参照）。

『語音翻譯』は 14 世紀の琉球語に関する貴重な資料であるとともに、近世中国語の資料としても一定の価値を有するものである。その中国語を扱った研究としては大塚（1990）があり、全体として『老乞大』・『朴通事』と同時期の言語を反映することが述べられている。本稿では、同論の驥尾に附して『語音翻譯』に関する若干の考察を記してみたい。なお、以下では底本として田中（1991：395-405）に附載された東京大学史料編纂所蔵本（明正德 7 年［1512］の内賜記を持つ）の影印を用いる。

『語音翻譯』は全 169 条の短文と語彙からなり、それぞれ中国語を漢字で記し、その下に対応する琉球語をハングルで記すというスタイルをとる。この 169 条を多和田（1988）は内容面から「紹介」（1-12）、「酒席」（13-30）、「時候・自然」（31-69）、「飲食物」（70-106）、「調度」（107-140）、「身体」（141-153）、「動植物」（154-169）の 7 類に分けているが、大塚（1990）が指摘するように、まず表現形式の面から二つの部分に分けるのが妥当と考えられる。以下では、（1）“你是那裏的人”から（30）“這箇人心腸歹”までの 30 条を「会話篇」、（31）“天”から（169）“虎”までの 139 条を「語彙篇」と呼ぶこととし、本稿ではまず会話篇について検討する。

2. 会話篇の中国語

会話篇は以下の 30 条からなる。いま田中（1991：278-297）により中国語の部分とそれに対応する琉球語の概略的な日本語訳を引くと以下の如くである。（　）内に示したのは同書の訳そのものではなく注釈から推定される訳である：

（1）你是那裏的人？「汝どこ人」
（2）我是日本國的人。「わたし日本人」
（3）你的姓甚麼？「汝名はなんというか」

（4）你的父親有麼？「汝父あるか」
（5）你哥哥有麼？「汝兄あるか」
（6）你姐姐有麼？「汝姉あるか」
（7）妹子有麼？「妹あるか」
（8）你幾時離了本國？「汝いつ島たつか」
（9）我舊年正月起身。「わたし昨年正月たった」
（10）你幾時到這裏？「汝いつここ来たか」
（11）我們今年正月初三日纔到這裏。「わたし今年正月一日来た」
（12）你初到江口是好麼？「汝港来たか」
（13）一路上喫食如何？「汝道々食事どうだったか」
（14）多酒。「多い」
（15）好下飯。（御肴）
（16）無甚麼好下飯。「さかなもございませんが」
（17）請一鍾酒。「酒ひとつあげよう」
（18）湯酒。「酒わかせ」
（19）洒酒來。（酒注いで来い）
（20）撤酒風。（酒狂い）
（21）不要饋他喫。「あれ飲ましてくれるな」
（22）小饋他喫。「少し飲ませろ」
（23）酒盡了。「酒なくなった」
（24）請裏頭耍子。「内に行って遊べ」
（25）平坐。「おらくにしなさい」
（26）面紅。「顔が赤い」
（27）面白。「顔が白い」
（28）這箇叫甚麼子？「これはだれか」
（29）這箇人心腸好。「この人心がよい」
（30）這箇人心腸歹。「この人心が悪い」

以上の 30 条には中国語と琉球語が必ずしも対応しないものが含まれている。明確に訳が相違しているのは（11）における中国語“初三日”と琉球語「一日」（原文 cui-ta-ji）で、これは琉球側が数字の「三」を「一」に誤ったというよりは、もとの中国語が“初一日”であったと考えるのが自然であろう。また、(28)の“甚麼子”は、伊波（1932）の言うように直後のハングル“구”を“子”に誤り、それが漢字部分に混入した結果と見るべきであろう。いずれにせよ、『語音翻譯』の原文書から『海東諸國紀』に収められるまでの過程において、いくつかの乱れが生じていたことが予想される。

3. 会話篇の構成

『語音翻譯』の成立過程について、多和田（1988）は『燕山君日記』の記録に基づき「成希顔が琉球国使節達（梁広等）と応待および応対しているのを、多分下役が、風俗・習慣等の事項といっしょに、筆記したのではあるまいか」としているが、大塚（1990）では琉球語の記述の中に中国語の直訳や誤訳とおぼしい箇所が見られることを根拠として「琉球側には漢字で書かれたものが朝鮮側から提示され、それを自国語に翻訳し、その音を朝鮮側が筆録したのではないかと思われる」とする。語彙篇に関しては後者の見解が正しいと思われるが、会話篇に関しては両者のいずれを取っても説明可能である。

会話篇 30 条は質問とそれに対する回答、及び独立した短文という三つのタイプに分けることができる。いま、試みにこれらの文を話題となる事柄別に整理してみると以下のようになる。

話題	質問	回答	短文
出身	(1)	(2)	
姓	(3)		
家族	(4)、(5)、(6)、(7)		
出発時	(8)	(9)	
到着時	(10)	(11)	
到着地	(12)		
食事	(13)	(14)、(15)	
酒席			(16)、(17)、(18)、(19)、(20)、(21)、(22)、(23)
応待			(24)、(25)
顔色			(26)、(27)
名称	(28)		
性格			(29)、(30)

上表の分布から見て、会話篇はさらに二つの部分に分けるのが妥当であろう。すなわち、問答が主体となる前半部（1）～（15）と、短文が主体となる後半部（16）～（30）である。

前半の 15 条のうち、明確な問答形式をなしているのは（1）と（2）、（8）と（9）、（10）と（11）の各ペアである。（3）、（4）～（7）、（12）が答に当たる部分を欠いているのは理由のないことではない。姓を尋ねる（3）は答として固有名が予想され、家族構成を尋ねる（4）～（7）は有無が答となる。また（12）“伱初到江口是好麼？”は中国語としては奇妙な文で、強いて解釈すれば「お前が最初港に着いたのは良かったか？」の意味になるが、琉球語のように「お前は最初港に着いたのか？」の意味であるとしても（この場合“好”もしくは“是

好”が衍字となる）同様に yes か no が答となる。したがって、会話篇においては、疑問詞疑問文には答を記し、固有名を問う疑問詞疑問文と“麼”疑問文（もしくは文末付加疑問文）には答を記さないという方針があったと考えられる。とすれば、(14)、(15）は道中の食事について尋ねた疑問詞疑問文（13）に対して二通りの答を記したか（多くの酒があった/よい食事だった)、あるいは二文で答となる（多くの酒があり、よい食事だった）ものと見るべきであろう。

後半の 15 条（あるいは多和田 1988 の言う 13-30 の 18 条）に関しては、そこに一貫したストーリーを想定することも不可能ではないが、少なくとも前半部の問答とは全く形式が異なるので、それぞれの場面における常用表現を収録したものと考える方がより適切であろう。とすれば（18）の文が後半部に存在しているのは不適当であり、この配置は伝承の過程における乱れに起因するものと思われる。なお、(18）にも答として具体的な事物名が予想されるので、ペアが存在しないのも不自然ではない。

4. 会話篇の語彙と文法

大塚（1990）では、『語音翻譯』に見える特徴的な語彙と文法を『老乞大諺解』及び『朴通事諺解』と比較した結果、共通する要素が多いことを指摘し、『老乞大』・『朴通事』の「新本」（今本）への改編が 1480 年代初期（1480-1483）であることから、両者がほぼ同時期の言語を反映することを推定している。周知のように、その後 1998 年に「旧本」（古本）系テキストに属する『老乞大』が発見されているので、これにより本篇の言語に対する位置づけが変わるか否か、即ち『語音翻譯』の言語は「新本」と「旧本」いずれの系統に近いかという問題を検討する必要がある。以下に、上記 30 条の中から取り出した 40 の語彙・文法項目について、『老乞大』・『朴通事』の現存諸本における有無を対照した表を掲げる。使用したテキストは、『旧本老乞大』(14 世紀)、『翻譯老乞大』(1517 年以前)、『老乞大新釋』(1761 年)、『重刊老乞大』(1795 年)、『朴通事諺解』(1677 年)、『朴通事新釋』(1765 年以前）の六種であり、このうち『旧本老乞大』は「旧本」系、『翻譯老乞大』・『朴通事諺解』の二種は「新本」系、『老乞大新釋』・『重刊老乞大』・『朴通事新釋』の三種は清代改訂本系に属する。なお＊印を附したものは大塚（1990）の中で言及されている項目であることを表す：

No.	語音翻譯	旧老	翻老	老新	重老	朴諺	朴新
1	你	○	○	○	○	○	○
2	那裏（疑）	○	○	○	○	○	○
3	我	○	○	○	○	○	○
4	你的姓*	×	×	×	×	×	×
5	O有麼*	○	○	×	○	○	×

6	哥哥	○	○	○	○	○	×
7	姐姐	○	○	○	○	○	○
8	妹子	×	○	○	○	×	×
9	幾時	○	○	○	○	○	○
10	舊年*	×	×	○	○	×	×
11	正月	○	○	○	○	×	×
12	起身	×	×	○	○	○	○
13	這裏	○	○	○	○	○	○
14	我們*	×	○	○	○	○	○
15	今年	○	○	○	○	○	○
16	初一日	○	○	○	○	×	×
17	江口	×	×	×	×	×	×
18	一路上	×	×	○	○	×	×
19	喫食	○	○	○	○	×	×
20	如何	○	○	○	○	○	○
21	多酒	×	×	×	×	×	×
22	下飯*	○	○	○	○	×	○
23	無甚麼	○	×	×	×	×	×
24	鍾（量）	×	×	○	○	×	×
25	湯（動）*	×	×	×	×	×	×
26	洒（動）	×	×	×	×	○	○
27	撤酒風*	×	×	×	×	×	×
28	不要Ｖ	×	○	○	○	○	○
29	饋*	×	○	○	○	○	×
30	小（＝少）*	○	○	○	○	○	×
31	Ｖ了	○	○	○	○	○	○
32	裏頭	○	○	○	○	○	○
33	耍子*	×	×	×	×	○	×
34	平坐*	×	×	×	×	×	×
35	面紅	×	×	○	○	×	×
36	面白	×	×	×	×	×	×
37	這箇（主）	○	○	○	○	○	○
38	甚麼	○	○	○	○	○	○
39	心腸	×	×	×	×	×	×
40	歹*	○	○	○	○	○	×

上表のうち、特に問題となるのは「旧本」系に存在せず「新本」系に存在する項目と、その逆の「旧本」系に存在し「新本」系に存在しない項目である。

前者のタイプに属する例としては 8“妹子”、14“我們”、28“不要”、29“饋”の例があり、『旧本老乞大』ではこれらに相当する語彙として、8“姉妹”、14“俺”/“俺每”、28“休”、29“與”が用いられている。なお、『翻譯老乞大』及び『朴通事諺解』にあっては 28 の“不要”と“休”/“休要”、及び 29 の“饋”と“與”が並存する状態にあり、清代改訂本ではそれらが“不要”/“別”、“饋”/“給”に改訂されているので、『語音翻譯』では比較的新しい語彙が優先的に使用されていると言える。このことは、『旧本老乞大』において 1 の“你”と“恁”、3 の“我”と“俺”、37 の“這箇”と“阿的”/“兀的”/“這的”が並存している点とも符合し、また 10“舊年”、18“一路上”、24“鍾”等が清代改訂本でのみ使用例が確認される点にとっても示唆的である。

後者のタイプに属する唯一の例として 23“無甚麼”があり、『翻譯老乞大』及び『朴通事諺解』での対応箇所は“沒甚麼”である。しかし、『朴通事諺解』は同じく「新本」系に属する『翻譯朴通事』（1517 年以前、上巻のみ現存）の“無”を“沒”に改訂した例が 4 箇所あり（拙稿 2005 参照）、未発見の『翻譯朴通事』の中・下巻では“無甚麼”が存在した可能性も否定できない。

5. 小結

以上の点から見て、『語音翻譯』の会話篇における中国語は「旧本」系よりも「新本」系の『老乞大』・『朴通事』の方に近いことがわかる。このことは大塚（1990）の推定を裏付けるものであると同時に、『語音翻譯』の中国語が 15 世紀末の口語をかなり忠実に反映していることの証左でもあり、本篇の成立過程を考える際の材料となりうるものと言える。同様のことが語彙篇についても言えるかどうかについては、次稿で検討することとする。

＜参考文献＞

伊波普猷　1932　「語音翻譯釋義―海東諸國紀附載の古琉球語の研究―」，金澤庄三郎博士還暦記念論文集『東洋語學乃研究』，295-402，三省堂。

大塚秀明　1990　「『海東諸国紀』の「語音翻訳」について」，『言語文化論集』32：49-62。

菅野裕臣　1991　「言語資料としての『海東諸国紀』」，田中健夫 1991：433-440。

申叔舟著・田中健夫訳注　1991　『海東諸国紀―朝鮮人の見た中世の日本と琉球―』，岩波文庫青 458-1，岩波書店。

竹越孝　2005　「『飜譯朴通事』と『朴通事諺解』の本文における異同について」，『KOTONOHA』30：1-7。

多和田真一郎　1988　「中世朝鮮・中国人と琉球方言」，『国文学解釈と鑑賞』1：155-161。